シェイクスピア作品にみられる be willing to の語法研究

池田拓誉

1. はじめに

現代英語において be willing to は自分から積極的になにかをしたいという意味を表さないと指摘される。例えば『ジーニアス英和辞典』では、be willing to は「be ready to などと違い，自分から積極的にしたいというのではなく，特に反対する理由もないので同調の態度をとる時に用いる.」と述べられている。そのような指摘がされる be willing to であるが、初期近代英語期における捉えられ方は少し異なる。初期近代英語期のシェイクスピア作品の語彙に関する辞典 Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary の記述では willing の積極的な記述と、積極的ではない記述が見られる。

このような現代英語との差異について詳細な分析を行うため、本研究では初期近代英語期のシェイクスピア作品を対象に be willing to の調査を行なった。

2. 研究方法

Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary では、各単語についてほぼ全作品の用例箇所が紹介されている(古庄 2023: 323)。willing の部分に示された用例は 37 例存在する。そのうち、(be) willing to の形式をとる 8 例を調査対象とした。その 8 例を高橋(2017)の力の行使のパラメターを参考に、独自に作成した積極性のパラメターを用いて分析した。積極性のパラメターの定義は以下のとおりである。

・欲求度：be willing to 以下の内容を be willing to の動作主が望んでいるか話者の視点で判断する程度。値に関しては、[-2]から[+2]の 5 段階で計算する。[-2]と[+2]は文脈や be willing to と共起する語などから欲求度が強化/弱化された場合である。
・コスト：be willing to 以下の内容が be willing to の動作主にかかる負担を話者の視点で判断する。be willing to の動作主に重い負担がかかる場合は[-2]と計算する。それ以外の軽い負担内容などは[-1]と計算する。
・利益：be willing to 以下の内容の実現による利益を話者の視点で判断する。be willing to の動作主の利益になる場合は、be willing to の動作主が進んで利益を追及する可能性が高いと判断し、[+1]か[+2]と計算する。be willing to の動作主以外の利益に関しては、（その人のために）利益を追求しようとする姿勢が判断できれば同様に[+1]か[+2]と計算する。
・条件：be willing to 以下の内容の実現を遂行する上で、存在する条件。条件とは be willing to の動作主が提示する条件のほか、規則などによって生じる必要性や他者からの依頼などである。このような条件を理由として行為を実現しようとするのは、積極的ではないと判断できるため、[-2]か[-1]として計算する。

積極性のパラメターに基づく be willing to の分析例を以下に示す。

(1) Princess of France : I am less proud to hear you tell my worth Than you much **willing to** be counted wise In spending your wit in the praise of mine.
※太字と下線は筆者による。（恋の骨折り損［第二幕第一場］）

(1)はフランス王女に仕えるボイエットとフランス王女の会話の場面である。ボイエットは(1)の発言以前で、フランス王女を称賛した。王女は、ボイエットの賛辞が頭の良さをほめられたがっているためと考えている。

上記の文脈を考慮すると、王女（話者）の視点で、ボイエットの欲求度が [+1]あるいは[+2]と計算する。頭の良さをほめられるのは、ボイエットの負担にはならず、利益になるため、王女（話者）の視点で、コストは[0]で利益は[+1]か[+2]とする。ボイエットが条件付きでフラン

ス王女に褒められたがっている描写は見られない。よって、条件は[0]と計算する。

3. 調査結果

(1)と同様の手法で分析した全用例（(1)は用例①である）の結果を表 1 に示す。

表 1：積極性のパラメターによる be willing to の分析

	欲求度	コスト	利益	条件	数値の合計
用例①　恋の骨折り損 ［第二幕第一場］	[+1] or [+2]	[0]	[+1] or [+2]	[0]	[+2] ~ [+4]
用例②　恋の骨折り損 ［第二幕第一場］	[+1] or [+2]	[0]	[+1] or [+2]	[0]	[+2] ~ [+4]
用例③　リチャード二世 ［第四幕第一場］	[+1] or [+2]	[0]	[0]	[0]	[+1] ~ [+2]
用例④　ヘンリー五世 ［第三幕第六場］	[+1] or [+2]	[0]	[+1] or [+2]	[-2] or [-1]	[0] ~ [+3]
用例⑤　お気に召すまま ［第一幕第二場］	[+1] or [+2]	[0]	[0]	[0]	[+1] ~ [+2]
用例⑥　十二夜 ［第二幕第一場］	[+1] or [+2]	[0]	[+1] or [+2]	[0]	[+2] ~ [+4]
用例⑦　十二夜 ［第二幕第三場］	[+2]	[0]	[+1] or [+2]	[0]	[+3] ~ [+4]
用例⑧　ヘンリー八世 ［第四幕第二場］	[+1] or [+2]	[0]	[+1] or [+2]	[0]	[+2] ~ [+4]

数値の合計の最小値の平均値は 1.625 であるため、仮に数値の合計が[+2]以上を積極的な用法とした場合、5 例が完全に積極的な用法に該当し、残りの 3 例も該当する可能性を持っている。調査で得られたシェイクスピア作品の be willing to に関しては、現代英語とは異なり、積極的な用法が中心であると考えられる。

無論、シェイクスピア作品の用例だけで初期近代英語における be willing to のすべての用例が積極的な用法であると断定することはできない。しかしながら、シェイクスピアの英語は英語史上重要である。シェイクスピア作品において be willing to が積極的な用法が中心である可能性を無視することはできない。be willing to が初期近代英語では積極的な用法が中心であった可能性は十分に考えられる。

4. 結論

現代英語では be willing to に積極性はないとされているが、積極性のパラメターによる分析結果から、初期近代英語期を代表するシェイクスピア作品においては積極的な用法が中心である可能性を示した。

参考文献

高橋英光 (2017)『英語の命令文—神話と現実—』東京：くろしお出版.

古庄信 (2023)「シュミットの Shakespeare Lexicon からわかるシェイクスピアの膨大な語彙の秘密～ Cymbeline を例に（研究ノート）」学習院女子大学紀要 (25): 323-331.

辞書

南出康世・中邑光男（編）(2022)『ジーニアス英和辞典 第 6 版』東京：大修館書店.

Schmidt, Alexander (1971) Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary, Vol. 2. New York: Dover Publications.